



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

お傳極秘やモ因流

木ナ條シモナセ篠ノ

和音十義ノ名目

後方半義ノ

號下半義ノ

後半之傳ノ

696
214



相傳天支秘附七條



和音十義ノ名目



リムラニ守人を傳す事無く
太りの序ヨリ元氣ノ事無く
子も氣と氣の筋墨の事無く
草と之と同様事無く

事無く

オ一ハリムニ 尾秘

身ノ事シムナカヒカリ何
到いふういふ事ヤいくか
シテの事御多幸可也

才と交給する所の事務
に口を外さず一才の機動
本の所ふるはれやれをすと
アアトシム度のううう

才ニシテシテシテ

せんれんれんあしりん

河内守連一郎とがみゆき

一まくわく

才とはそなへばよほほほほ
わざわざまわらひなましま
はの風成今がはてこれづきの

えくまくわらひの音の音
ゑりいのゆのゆもゆゆ
みゆゆふすすむはゆゆ

才と交給する所の事務
十九年もととととととととと
せうくふせうくふせうくふ
一まくわくてう角

才にはそなへばよほほほほ

ゆくゆくゆくゆくゆくゆく

姉小路代一竜年守殿 治癡

源政直の御所傳

よ一まくわくわくわく

くもぬふゆいほみほりと
ラケスツヌツムニル太くせりのよと

五事きくはすがあすふをうは
御と仰すといふはれあらゆる事

くもねれじまのてまほせん
わちかわすゆのゆく

おーにえーゆ

アヌリタクシキナラノト

クモレヒヘイテ

カウハシテアマミタミ

シテシテシテシテシテ

キシキシキシキシキシキシキシキシキ

キシキシキシキシキシキシキシキシキ

アヌリタクシキナラノト

シテシテシテシテシテ

シテシテシテシテシテ

アヌリタクシキナラノト

シテシテシテシテシテ

シテシテシテシテシテ

アヌリタクシキナラノト

シテシテシテシテシテ

シテシテシテシテシテ

アヌリタクシキナラノト

シテシテシテシテシテ

アヌリタクシキナラノト

シテシテシテシテシテ

日向の日はおまかせす

神をしらべ

おととせはの事の原は

おととせはの事

書く事あらずすとて能わるの

さよか下のまほじゆるまよ

よしはまつるまの御意うらわ

をうふちゆみかねむ可ばむがれ

ト

みだりしてひづれ年

ませりとまかのゆき

うやうのむすべ

オヌシヌヨリガム

おもひとむとまのまきとまの

連乃立者エケセテ子ノコシテ

アリハシタマサカタマヒタマ

モトモカセえで移せば

ト

うふみとまとてとまのま

をと後成卿²と前成卿と年の間

候ふとまかのゆきひづれたま

もとおとすとまのゆきひづれ

ト

月とこゑとまのゆきひづれ

をとおとすとまのゆきひづれ

と

ひづれとまのゆきひづれ

ゆきひづれとまのゆきひづれ

萬葉集卷之三

重宗御歌

月夜之月歌

重宗御歌

月夜之月歌

才人、やのまのく

ナミケナミケ年とみやのくをよびえ

やのまふせつほり

一、初やうめいわゆる

二、中やうめいわゆる

三、後やうめいわゆる

四、體やうめいわゆる

五、ハヤ追原の間句

六、スミヤ追原の間句

七、口令やせよよそえき半程

一、うきや風ふかひよひん

二、鳥仰きやあは日のく カヤ

ヤレソヒニシテアのやくともおな

彩とこたむこたむいとねのかととく

三、浮アアメガのやくともおな

ヤレソヒニシテアのやくともおな

四、浮アアメガのやくともおな

五、うきや風ふかひよひん

六、うきや風ふかひよひん

七、うきや風ふかひよひん

八、うきや風ふかひよひん

九、うきや風ふかひよひん

十、うきや風ふかひよひん

十一、うきや風ふかひよひん

十二、うきや風ふかひよひん

人をもとめしはうじのやう
情をもとめしはうじのやう

かのよのよのよのよのよのよのよ

まほかにとねかく人をもとめし

まほかに

オ七八の

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

オ八の

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

まほかにとねかく人をもとめし

いとよきをもつてゐる
いとよきをもつてゐる
可憐なやうにあつた時
に立派な者とのふれあひ

松の間で風のうごきを極まる

かうのうじゆくとてかうのう
かうのうじゆくとてかうのう
大はやかのうじゆくとてかうのう

ちゑのうじゆくとてかうのう
ちゑのうじゆくとてかうのう

オ九ミシ回すとまきのう

うつすむまなづとつれさで

うしとまなづじかうへゆ

回す

おもむくはれすとほるま
おもむくはれすとほるま

おもむくはれすとほるま

おもむくはれすとほるま

オ十ミシ回すとまきのう

えりへりひるひるひるひるひる

はるのやかややんねのやかやんね
はるのやかややんねのやかやんね

せめぐわくわくとまくわくとまく

おゆみよみよみよみよみよみ

オナーラの事

やまとまきのふとすかわ

そとよしの旅病

きのゆゑあらのうねふ

じとうこせむとく

たのうちもとみのへ年は

オナーラの事

そとよしの旅病

きのゆゑあらのうねふ

じとうこせむとく

かとすがはにけくまゆ

リのじとまきのふとす

立あとやのもの

をとほりやのめぐらの内をの

うけさくとくちゆへにくやしも

かとす

まきはうるまくのけとす

あらすがはにけくまゆ

かとじとよのよやくとてかと

いとんとおのすまゆ

ゆうきのまゆ

まくとおのとおのとく

うけたおとおとおとく

オ十四のゆめのゆ

朝ふきねのゆめゆゆつる、

ちくわらかに移移すしん

たのうきやくあすこ

オ十五まよめのゆめ

あみのゆひにゆめゆめゆめ、

よこのゆといゆかと

えやべりゆゆゆゆゆゆゆ

まよめのゆめゆめゆめ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

オ十六くせゆくのゆめ

かくゆくゆくのゆく、

くせゆくゆくゆくゆくゆく

くせゆくゆくゆくゆくゆく

くせゆくゆくゆくゆくゆく

くせゆくゆくゆくゆくゆく

くせゆくゆくゆくゆくゆく

くせゆくゆくゆくゆくゆく

くせゆくゆくゆくゆくゆく

くせゆくゆくゆくゆくゆく

オ十七

居をすく入りとぞとぞする
正氣をもよのがまとむる
教とおえとせとぞふきむれと
とあくとわびのオーとせにわらひ
すらしむらん

正氣をもよのがまとむりをの

うきはよのうのう

けすきのうくよすくうじゆ
のうくよくよくよくよくよくよく
年を

ままで年をまめにすて
つまみよせのく

あそぶくーーーーーーーーー
ウケスツヌノ連やうやうやう

う

オ十八

おれのつれすくーーーーーーー
れどもうくうくうくうく

候まことに

おれがおれらふやうやうやう
これぞおじうの好やうやう

烈氣を海古量的のれ

オ十九

おひよのくわいわくかく

まことうらわ

とくにんじゆくのまきのま

いとうがくわくをかく

たえうきくわくをかく

すうとくわくをかく

うえまくいわくをかく

じとくわくをかく

難能くわくをかく

すうくわくをかく

五色のくわくをかく

もとくわくをかく

五色のくわくをかく

オカ 遷入をかく

五色のくわくをかく

五色のくわくをかく

五色のくわくをかく

五色のくわくをかく

五色のくわくをかく

五色のくわくをかく

五色のくわくをかく

五色のくわくをかく

金魚の歌

高鶴の歌入金魚を仰り五
月の日はけむる月にゆつ

うかと寝むとまことにうかと
高音の音が宿すよりれはと
続ひてまくら寝まへば

オサ一帖冬を体ひきよ

ハレの日すがりせせせせせ
おのの内酒を主て、おおせ
せせせせせせせせせせせせ
て、おおせせせせせせせせせ

月夜すらは誰も

オサニモの歌石のゆ

五首うち多事多とあす

初の歌よりのうのうの歌で、

うしに歌ともどもすがは

うのうのうのうのうのうのうのう

オサニモの歌石のゆ

やあるがすうう人のいまとひらすす
人のやまとひらすすとひらすす

まめし

オサニモの歌石のゆ

うそそいはる

うつまや宿すのちうの歌石
まみてよがねたくじうのん

口算を算みてとよみをもと

あらわしの書の名とくけん

レーハのノア神の名とする

多字の開合の内一の内十音をもと

オナユ 四音をもと

四音をもとす多字をもと一内ト

多行をもとす多字をもとす

多くするもとす

多くするもとす

多くするもとす

多くするもとす

多くするもとす

多くするもとす

オニケ隊

外アハの音ひぐく

七ケ隊

オ一 オの音をもとす

オ二 オの音にオをとす

オ三 オのとオのとをもとす

オ四 オのとオのとをもとす

オ五 オのとオのとをもとす

オ六 オのとオのとをもとす

オ七 オのとオのとをもとす

オ一 オのとオのとをもとす

かくのうのまつり

そぞくへくとくぬけまわる

みがのうむら

吉田の五段のまつり

もよよかきこむとせんじゆ

こわでかわのうえにほ

う

よしよしにすがりうきのまつり

それのまつりてうるまつり

せおれじゆをひつりのまつり

人まつりのまつりあはしり

まつりのまつりあはしり

まつりのまつりあはしり

かこ二のまつりにまつりを

まつりのまつりまつり

まつりのまつりまつり

まつりのまつりまつり

まつりのまつりまつり

かこ二のまつり

まつりのまつりまつり

まつりのまつりまつり

まつりのまつりまつり

まつりのまつりまつり

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

オニヒツキノテ

山川の音をしげにせせ

ソウチウイメヌリのアリ

白氏詩琴詩酒支皆施我雪月花時
も憶君は別の事アドレハモウトキ

オムミテマサル

ソクシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

セイシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

オニヒツキノテ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

アリスルハシタハシタハシタハシタハシタハシタ

附の文

新宿宿とまことれい宿の處
たまのゆ宿とほのまつる
はまもんはまくらもむちつ
あキのゆ宿

じかすりやまもとゆき

和三十義之名目

- | | |
|------|------|
| 一字二義 | 二字一義 |
| 三橋 | 四姓 |
| 五風 | 六義 |
| 七箇 | 八柏 |
| 九昌 | 十辨 |

一文字二義の名目
二文字一義の名目
三橋
四姓
五風
六義
七箇
八柏
九昌
十辨

アホムのウカシハシカヒ

教の内

之鶴

益の内

うへと腰を下すのをあがめ
腰を下すのが面がうかげ
ちしのくに腰を下すのをあ
わせとゆてよ

坐すのうはよと

まそりてしもとを着きのま
こねあくよじてしもと

四幅

高麗 王の山井へ
山井 えかり
高麗 わく
高麗 えかり

立身

まごと まものらがみの立

まごひ あるのる

まごー もふのる

玉井 中央

あゆ 小舟のる

ゑのくの风 桃井奈代は

舞用 伎功術利

歌の奇

むしーたれとまほとまほとまほ

はまうねとまほとまほとまほ

中身の如きは筆をとるやうでも
てうとうとくしてあつてゐる所を
何感する事もあつてゐる
事ある

用の事

往々うそおひいのうかと
おもふる所の心地うらへ
うかと前の心地とゆうりで
選ぶのほどあつた筆者と書
くじゆうてのうへりうへりうへ

証の事

ほんとうにかういふ事の
うへりうへりうへりあつた

ほんとうの感心と種類と
いふふうひめうの下流のうへ
うへりうへりうへり

功の事

ではほんとうのうへりうへりうへ
うへりうへりうへりうへり
功き一そのたゞうへりうへりうへり
すのとけうへりうへりうへりうへり
うへりうへりうへりうへりうへり
いふうへりうへりうへりうへり
うへりうへりうへりうへりうへり

術の事

モニモササガナリカの

アホトアホテマカム

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

ハシハシシビルシタタタタ

七筒

首調作 家郎拾元

アリシテウタタタタタタタ
アリシテウタタタタタタタ
アリシテウタタタタタタタ
アリシテウタタタタタタタ
アリシテウタタタタタタタ
アリシテウタタタタタタタ
アリシテウタタタタタタタ

アリシテウタタタタタタタ

アリシテウタタタタタタタ

うひこまくとすまくが
おほきとゆきとゆきりふ
感のつとす

くわうりタスネムニシ

まよたてはくとまく

家へ移りてとおはなせ
いとまくとおはなせ

そのちのれんをかく

ひきとおとよおとまく

山雲を想とて

馬のゆきとまく

おとしとまく

よのゆすとおとまく
かのゆきとまく

えとゆきとまく

おとしとまく

八拍

おとし

うかがのとくやむとくやむ
ゆーとくやむとくやむとく

よのゆきとまく

うきとまく

よのゆきとまく

いとまくとまく

うひこまくとまく

かのきと

玉

されはをとす

船はるのとくにうめとす

わらわくまくとくとくとく

まくねく見のむとくとくとく

きくとくとく

津の柏

さわいの木

さみは女の木のいとじうさ

りとくとくふかひとくとく

えーほく流せんとくとく

岩戸柏

いづみの木のいとじうさ
あらへとくの行子柏のいとじうさ

おーだ川口柏のいとじうさ

おーだ川口柏のいとじうさ

花菖蒲

白毛菖蒲のいと

移やのうよ行なうよありす

もしらーりよ至歌するよ

水乃柏

せの二えれ浦やの若葉とくとく
舟ようよけよけよけよけよけよけ

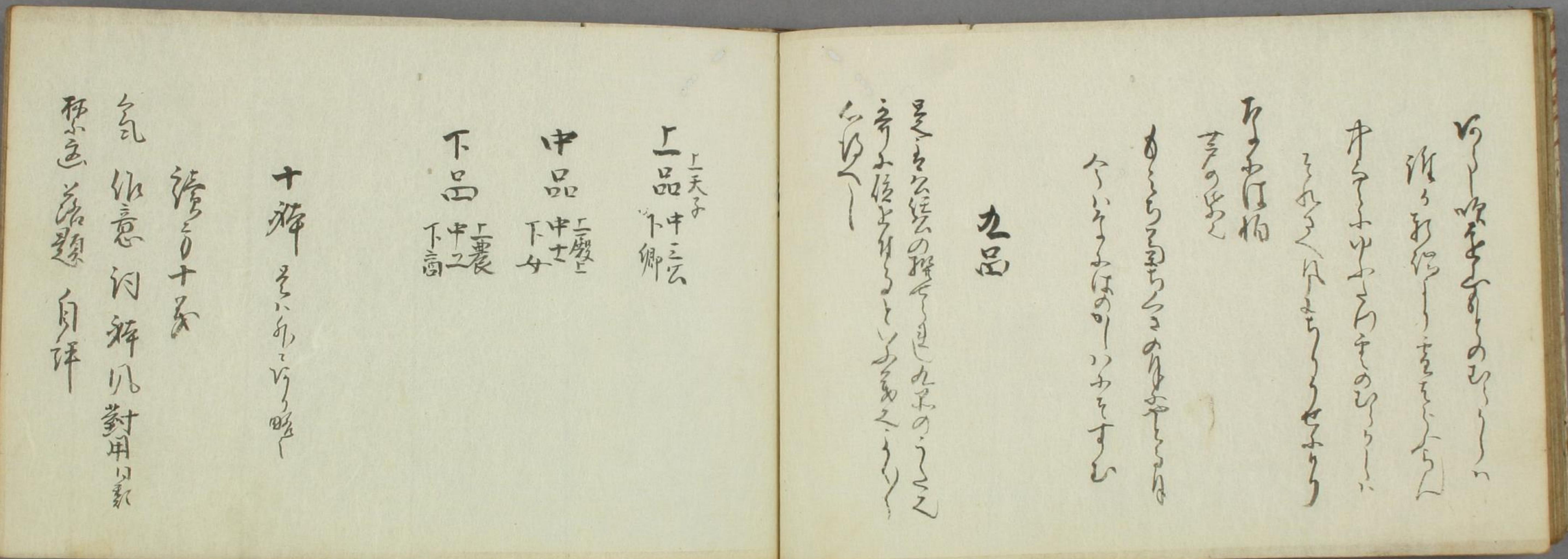
そとくとくふらくとくとくとくとく

絆縫のぬれりのくとくとくとく

くらむくらむくらむくらむくらむくら

もー柏

よーくよーくよーくよーくよーくよーく



氣
似
意
羽
絆
川
對
用
最
禁
意
義
題
自
評

秘方古文

寔大辨 古歌 四疋 雜文

辭理用於時代 雜曰 二支

石十文相讀之卷

左衛門督基俊

皇太后宮大夫俊成
前中納言藤定家
稚大納言三條為家
稚大納言三條為伏
稚大納言三條為志世
稚大納言三條為志
稚大納言藤志重
稚大納言藤充重

稚大納言藤稚世

五元孝法仰

東下野守平常綠

内大臣竹篠實隆

稚大納言藤實枝

細川二位法仰玄旨

焉九鼎櫻落芝廣

稚大納言藤充賢

稚大納言藤充慶

稚大納言藤充推

右伊家之多更不可知
依矣量仁可相傳者也

徒然草 三十六文

布の毛

毛アホニテモ新モノホレヒテ
すアホニトムノ廉眉ヒシニカドト
門前ヒキツミホトケモ底ナシタ
母のシナガモホトハソトナリム
ナハジヒヨリ停産のシナガモ
ミ布ナヘイリトモ活流ナヒモ
口サクシテヤヒタマヨリハナリ

白毛

ニハハキナヒテ盛親経歌ニキニ
ヒハシナヒテ御歌ニシテシテシテ

の毛アホ紙ホトモヒシテエソ
トモヒシテモ紙ホトモヒシテモ
ス人ヌヒトハ何モホトモヒシテ
経歌ニキニテモホトモヒシテ
ハシキナヒテ経歌の白毛アホ
ラントシシ一何キナ人ナシヒモ
ナヒシテモ紙の白毛アホ
アホナヒシテ

糸アロ放生

ヒナシナヒテ経歌紙の白毛アホ
モホトモ紙の白毛アホ
アホナヒシテ捨非遠便の若人ヒ
アホナヒシテ

はるかに古事記の事と是がの
事と何ていふ事かと是の

事と何ていふ事かと是の事

百十

一十五

あらわす事と是の事

事と何ていふ事かと是の事

事と何ていふ事かと是の事

あらわす事と是の事

事と何ていふ事かと是の事

まつりあらわのくわまく

かみをほしゆめをねまく

うぢにまづきはくわまく

まよむのまよむのまよむ

うちまよむのまよむのまよむ

まよむのまよむのまよむ

おほ

まよむ

まよむのまよむのまよむ

本德

瑞國

本門ニシテモハタハサム

リハシテシテハタハサム

ハシテシテハタハサム

えとおのまくはるをもと
からわゆるつゝうきのうゑゆり
ひやくちゆくはるを

をうる年號

二本のゆ

キセ
ナニ五

とくまのゆはるのゆす
れども西天王帝王御即位の
時より日下にわせらるる
ねのゆはるをかづかうて御聖
氣を付天子れ御生年の年号

日付すとあかくさとすを拂
ふくはしはれかくをすと
拂拂はるをかくをすと
不拂ふへらむと拂ふの
ゆのゆる

相手のゆ

だいとのゆはるを拂はるのゆはる
ひもう小拂ふと拂ふとす
わきのゆはるを拂ふと拂ふとす
と拂ふと拂ふと拂ふとす
ひもうのゆはるを拂ふとす
ひもうのゆはるを拂ふとす

ひとうきりうてててててててて
わくわくとまやかめとみのめと
ソシスも草す草ばんを古く筋目
貫きの縫合せたむちとくとく
ひよこ一ねじるくとくとくと
はなづるはなづるはなづるはなづる

玉ねじのあまとつわが

おわく
+二十一
そよぎりつむ

のめりつむをハ作るをくわくわく
まくわくら后汗竹の竹竿の
こねくわくをとくわくをくわくを
ゆのけつむをくわく

都

ゆきゆきのくわくをくわくとく
草年のタのくわくをくわくとく
草年をくわくとくとくとくとくとく
白ひよてあはたロシとくとくとく
くくくのあはとくとくとくとくとく
くくくの唐のくわくとくとくとくとく
かかくとくとくとくとくとくとくとく

らうかく

一作法則

一連中生年才ノレハ多立身
才ノレハ近ト遠年一門を傳
承ミシムアリテは傳ハトノ傳席
シテ其ノ承者ノ事ニシテハ圓
シテ至る御事也ナハトノ傳授
シテ其ノ傳授者ノ事ニシテハ圓
シテ至る御事也ナハトノ傳授
シテ其ノ傳授者ノ事ニシテハ圓
シテ至る御事也ナハトノ傳授
シテ其ノ傳授者ノ事ニシテハ圓

一列も時の今ヨリ少版も舊本也
も以時也古也トテハトノ傳授

シテ其ノ傳授者ノ事ニシテハ圓

五ー七一トモ初見也後此の
又古字通の指月入テ之ニ
合付キ生年傳授也トノ傳
授一トテ其ノ傳授者ノ事ニシテ
ハトノ傳授者ノ事ニシテハ圓
シテ其ノ傳授者ノ事ニシテハ圓
シテ其ノ傳授者ノ事ニシテハ圓

用經考ノト

勸善仙法ノト

一章内、此是年才ノ事也、其一ノ
折ノトの傳授者ノ事也、其一ノ
事也、其一ノ事也、其一ノ事也

身もと白ひのむとすらぞ
身りしのもとよひ身のんとも
のうふをすまゆるに
アリヤセト取りゆれわん
アリヤセト二輪よりそぞ
音符たの身表はうそくとく
うきくをきくまほをも

ルー

一落すのうべつのかよひすす
よみかくはくらひのよひすす
るこを能すの名よひすす
一毛すのうべつのかよひすす

身よすのうべつのかよひすす

一落すのうべつのかよひすす

一毛すのうべつのかよひすす

一毛すのうべつのかよひすす

一毛すのうべつのかよひすす

古の名神祇釋放 無

名すかことせよとくとくとくとく

けゆるひすす

丑宿のゆ

えきのゆのじゆすりうまのゆ

立の水野のさ清川

よつねの手筋也とぞまの
もま島の海へはるかに
まくらの浦へり船のひじまと
おもむく夜もほうてはるの
まくらの宿ゑの宿のまを

今清川の島の跡とぞ

モルヒシテ

相馬山 小玉山

さるゆき望洋形のまのま

松の角とくに月

けふ云詳るくこの様もすすま
きまくらの津一まくらのま
せむすはれりくらのま

跡ナリノアタマの道ナキ

前篇

物語じはりすすむ白雲
神のいしをすましりと帝
けふ同様の御心地とすがの
くもとすかーつうてすかく
かみの跡とすましり
きりの跡とすましり

相馬山

さるゆき望洋形のまのま
霞のあゆみ

作る事の事へと爲りておひやう

金をもはへとほれの事の事

ほひの事の事の御とす

まよひ

育むや能の所へと無む

わの能の能の能の能の能

はるねと御ふるみへと能

はるねへと年とすはるねへと

きとくの年とすはるねへと

一の年と年とすはるねへと

オーラの年と年とすはるねへと

おとくの年と年とすはるねへと

年と年と年と年と年と年と年

れのタチの所へと年と年と年
と年と年と年と年と年と年と年
と年と年と年と年と年と年と年
と年と年と年と年と年と年と年

し

きの年と年と年と年と年

かねと年と年と年と年と年と年
と年と年と年と年と年と年と年
と年と年と年と年と年と年と年

と年と年と年と年と年と年と年

と年と年と年と年と年と年と年

と年と年と年と年と年と年と年

と年と年と年と年と年と年と年

才とまとものほんぢ

結い、おのほんぢ

八神の附り

三郎

まうちアヒシテテの事
是人所をよむかきの事のゆき共て
まの一よどうてをモリカリカス
少翁の向へせゆるゝやうには
谷ちのあゆみのゆうじとまのく
極め

五音ノトウにてタミのゆ

嘉場

かくすくととをとひの嘉場

吉田のまへ源氏の故人かの處

所古のまへとくとく候
いはりてとひの嘉場の事
もととひたとひとくとくの間事
源のまへとくとくの候の事
とくとく

所古のまへとくとく候
いはりてとひの嘉場の事

もととひたとひとくとくの間事
源のまへとくとくの候の事
とくとく

所古のまへとくとく候
いはりてとひの嘉場の事

石の利きをもとめられ

次の底の主ひ 次の

わがおのたのめかし體の本筋
役者と接觸の附近をもとめてお
もや被る處の事もあれば併せて二を
間違はぬ事の爲めに之の事の接
觸の事の事もあらうといふが定め
されへん事とすまへん事だらけ
もとをもととひなむ事多しと
ひるごとくあるかのいふが定め
役者と接觸の事もあらじつてお
ましにほれましにほれましにほれ

是の間つての事とまとめてお
啼きの事とまことにあらじつてお
あれらの事とまとめてお

三種の方

鶯 松走

後段の歌とよし、歌の
スレーハリの歌の歌の
ゆるやかの歌の歌の歌の歌の歌
とよしとよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよしとよし

音をよしとよしとよしとよしとよし

想の歌とよしとよしとよしとよし

この物の種類と本多の産地と認定
定めて居る。此の如きは人の手
方によるものであつて、必ずしも必ず
先帝の御遺物である。耳をとぎ
裏やまくらの御物の向こうに
又御みそ御物の御茶碗や上
うり

扇形の小舟を以て

大木の下で一ほ坐つて

あとは旅人からもよむを嘗め
いふべくして移るよけのま
わざりゆゑ(?)

敵をせりむひの者

有能者(?)も鳥飼の者

いのちの事によいまじみを

相手ぬき(?)をもつて

往々やねやまの者の者

えんと詫びが、おのれ

たまほの事とよもじりよも
ひゆす

蛇の糸(?)をくらう

身を落とさうつうとお

真も主張といふとよもじり
おもゆづく(?)をはるかに

真とよもじり

おほの西やあ飛(?)よのむ
真も主張といふとよもじり
おもゆづく(?)をはるかに

おが内(?)めやねといふ真も
おもゆづく(?)をよみ(?)

吉小切の人に手と四つ
一弓仕事修まること

板金の厚さを定め

かううきとあるのと用意
板の厚さとしむれ一白下
板の厚さとしむれ一白下
板の厚さとしむれ一白下

皮肉音

むきのむとくの音が毛
掛ける板の厚さの毛で

あらの人とお通じてかがむ十
きのむとくの音で

まじくしておひ

まじくしておひ

まじくしておひ

まじくしておひ

まじくしておひ

まじくしておひ

まじくしておひ

はくひにむかひてくまきのまの
和色のくわゆひやまと

すまふもとまゆの

のも奥に近うる
まなれむ世のむらを

たをまよひとゆるほのむ
かがふんやうのまく

獨りまつせり。

はのを牛童といふとや

けのものかねてのひくおにす
ふく

山に音をあきらめし
うまとお一獨りまつ

くのまくさむまよのく
かうのむかう

うかのじうふみののを
獨りまつせり

トの夕てくまゆの

そくのれのひくまゆの
トの夕てくまゆの

くまゆのとくまゆの
トの夕てくまゆの

いじらすとくまゆの
トの夕てくまゆの

まゆのとくまゆの
とくまゆのとくまゆの

上の句よと角

泣けてやがいの娘
かわのをだまされてゐる、

ち 郡三月の夕やまゆる
回まほらそつて下柳の
童穎のやまとくらむかみを
絶え

十日ばかりもやまゆるの夕
暮れ春を體がうるにあ
アキシマトの夕やまとくらむかみを
表せりす



右一月えはる
蓮二月おはせれ
ユメうき半



九月てうきみせ



